



明治庚子日記  
三十二年

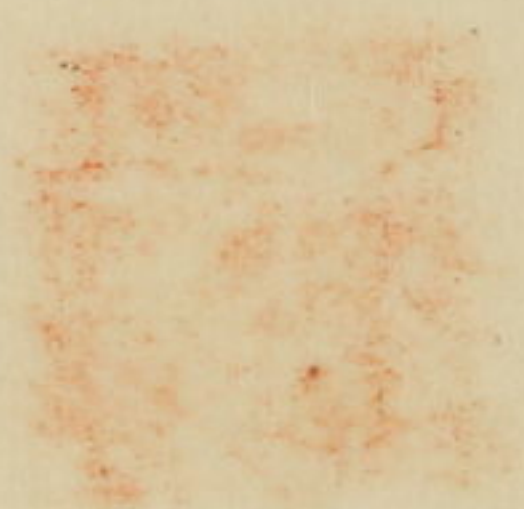
未號

早稲田大学図書館  
文書27  
A101





明治三十三年庚子日誌宮島誠一郎行年六十歲





年数

六十三歳	誠一郎	十九歳	文藏 <small>男</small>
五十八歳	書六代	十六歳	武子 <small>男</small>
三十四歳	大八 <small>長男</small>	十五歳	徳三 <small>男</small>
二十六歳	書芥	九歳	梅子
二十七歳	可部	五歳	豊子
二十七歳	祝三	六歳	貞 <small>初孫男</small>
二十歳	孝子	四歳	沙 <small>孫男</small>
二十歳	恵子	二歳	阿文 <small>孫女</small>
二十歳	滋子	四歳	清女

三十一年一月日誌

一月九日

福祥如山早天紅旭輝空門前杉竹依然呈翠  
賀友歌集

前田東笑屠之難献酬家人日新雜烹餅  
志例因之を用心集固茶同献

長政来候献酬

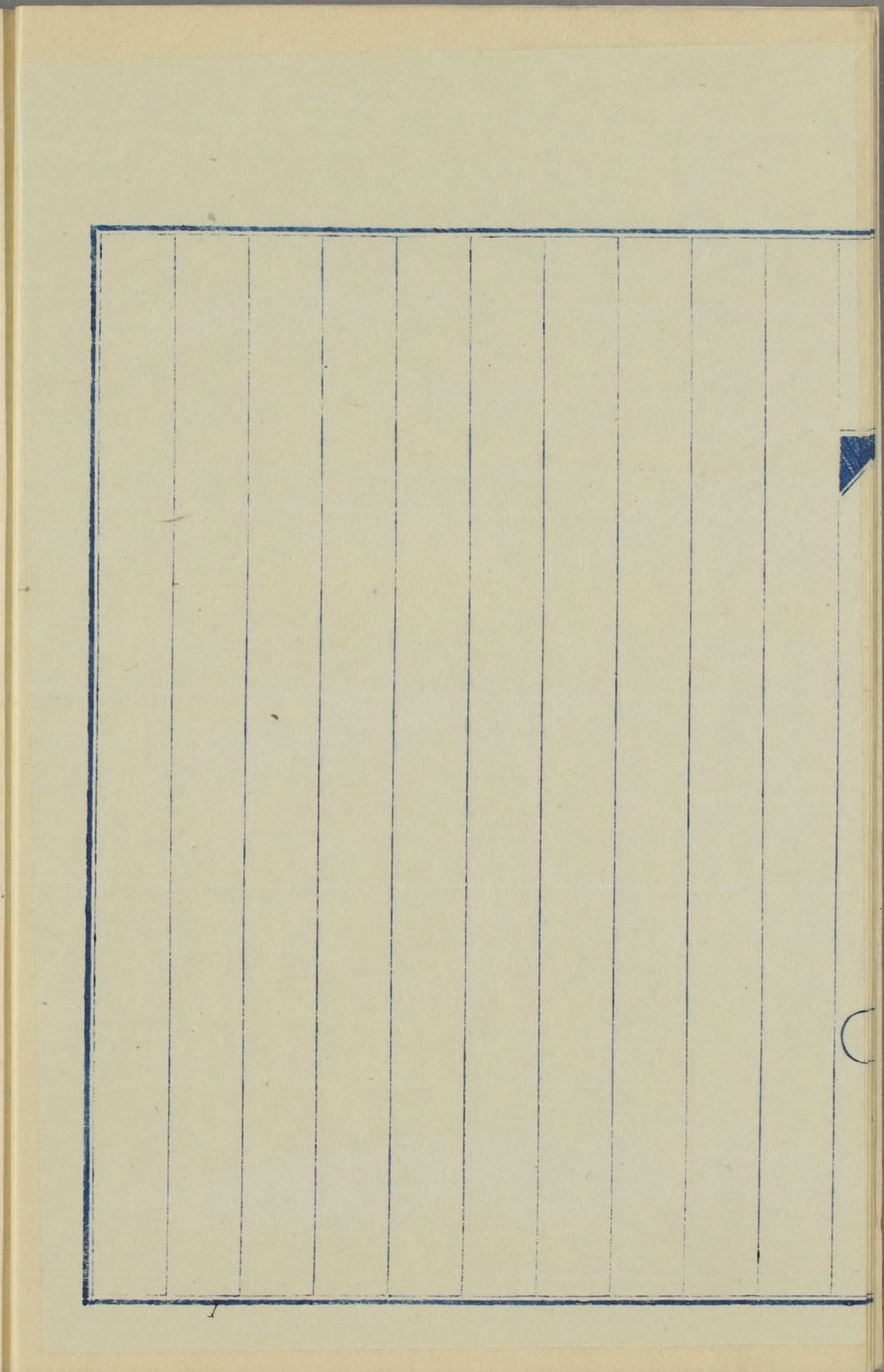
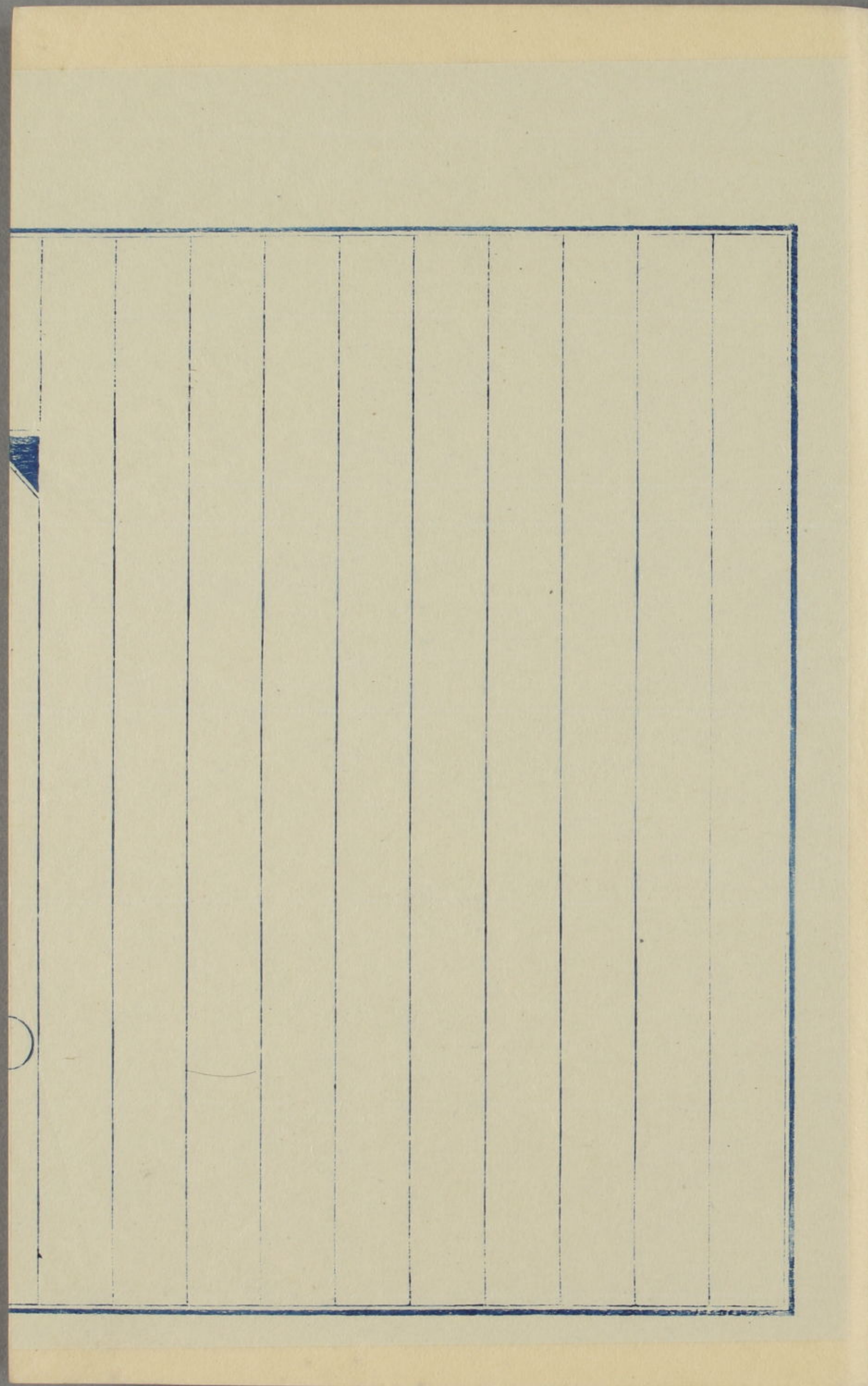
午坂新宅を問ふ梅子道一  
可市鶴之二枚お屏風表出

大八顔真卿之右法帖屏覽



晚方古而年亦笑對食以相今詢  
二日涉涉日先出寒氣烈







以下  
35丁  
白紙



古夜不來 於劉田田粵池岸坊本  
寺、曇

大八大山の年の一の道來是處深分部に助借り  
午前九時半に掛山方相と在不在

鹽河を一の井に多く前並三枚金銀入り  
上野徑師在るを表表懐お僅僅ききしり草奴短立  
考覽長了。白鳥鴉傳渡り小雨瀧末

黒と提馳車鐘淵の積雪は水神の吃空鴉傳渡り舟  
吉原提下り河津といふは内宅 宿新宅

十一

早起東提大八七呼の善鄰書院擴張之観亭  
大山の威権老深部に不燃為深吹長の長也  
おし妙身物子の道といふは大山新りの一

劉田田陸軍省任官

可不節提後り内宅 晚天降雨臨し

午好古夜來る印田増地代を割きては後半柳亭  
古夜地代百九十圓收納廿月六日分地代所



十月廿

寺田君係長片り直野上主

第五師團之六、改り大佐に命じ一有るを直野上主

祝之者山暮茶 上泉お久相美身、既後也

十月廿

能一三車夫より鳥籠獲（三莊島）

午前洋館あり花燭之掃除小平経次打込築山出来

掃除候、早に七時出り。阿滋来美一防大を

山下より舟へ、三寺甲州海軍隊送、阿滋来美より東洋舟

三長邊に、夜産あり、知火

十月廿 日曜

早起園庭掃除灌花洗石

前田之於田中細帯

掃除候より徳女より、幣巾、山下源六、天津

以、是、口、物、形、に、渡、度、艦、長、島、村、大、作、以、掃、除、候、

事、の、渡、舟、中、候、に、為、り、毛、の、天津、に、御、拜、候、事、に、

尤、も、御、拜、候、有、海、兵、之、際、隊、隊、引、揚、り、成、り、御、拜、候、

艦、の、渡、り、一、山、下、若、枝、改、修、候、に、御、拜、候、大、法、に、御、拜、候、

水、足、り、し、食、物、の、ビ、ス、ケ、ット、灌、注、致、敷、不、足、列、の、氣、候、に、御、拜、候、

涼、し、く、も、一、島、村、大、佐、の、向、け、出、立、候、







此の予 聯合軍に死傷六百なり 時事外

北支天津より露西亞將官死の電報あり

福乙のロドの司令官道、報告あり

西公使の密使来着 海軍省公報 七月十日午前

西公使より森海軍中佐死の六月廿九日附書面六月

三十日北京出發及七月十日天津着、秘密使

者より到着書中及之なり 時事外

密使地方形勢極く危急法廷官軍大砲砲撃海軍

等公使公使館と射り圍み攻撃書此等事、公使館

員護衛兵死力を盡し、防壁も亦海軍兵と死闘

且夕々切迫す將、艦隊の福を見、公使艦軍列

着、圍を破ることを希すなり

秘密使者曰く各國公使及び公使館員一日英國公

使館に在り、董福祥其他、支那兵連、攻撃を

受、館内糧食欠乏七月一日以後、他より得、道に

密使と云ふ、亦中使、一、隊、席、向、軍中、在、

通信、急、七、出、七、報、を、飛、ぬ、もの、打、ら、ん

本支艦隊、北支上海報

本支艦隊十七日、北支、海軍省、海軍省、

馬、当地、航、せん、



おやまの所へ行くと榎木、長政熱心な指導が  
しきりに山下海老原の十三の戦、長政の如く  
長政熱心な指導が

十七日

野大八相根行く一因り年、勝面

義和團の所へ蜂起火勢盛なり

野大八相根行く一因り年、勝面

黒田伯耆守の如く、忠状を呈す

古殿寛三力加、勝面、忠状を呈す

少尉、成る、他、忠状を呈す、その、忠状を呈す

長政、越後村松、長政、忠状を呈す

長政、越後村松、長政、忠状を呈す

天氣、皆多梅、忠状を呈す

由宅、故、腹、部、不佳

入、法、知、寺、後、方、の、大、十、割

十八日

雨、下、梅、忠、長、政、の、忠、状、を、呈、す

午前、卯、祝、三、見、舞、を、奉、り

午後、大、八、相、根、忠、状、を、呈、す、忠、状、を、呈、す

天、の、為、め、目的、の、強、羅、羅、湯、石、地、行



晚方より黒田伯の訪朝鮮一事を村長談話中  
西軍大軍の電報未より山下中佐十三日天津  
攻撃の報告あり。山下中佐は天津の  
り他七比天津攻撃の消息あり拒み吐却收其  
り十一日水師船名及び撃つた打撃あり。高、  
日米英の三手多天津の海を為し以て死に水師  
船七隻あり。天津城の西橋を立橋七日日本軍  
あり聯合軍の艦隊あり先づ大沽の天津あり  
連絡の西橋の先づ海軍あり。後、祝賀の奉  
地あり。天津の海軍の侵襲あり。天津あり。

新宅一室

十九日

昨日先づ計治。長路の酒一瓶鯉を贈る

先前所寄の香山、伊丹、平廣の森、陸、七、中、月、里、橋、之

野、草、一、板、垣、川、村、の、雅、友、の、名、也

土、時、半、駿、河、是、一、井、の、糸、當、三、中、屋、能、と、ん、内、屋、自、本、摺、到

雲、和、鯨、海、角、鶴、海、若、油、没、。午、後、時、の、草、ノ、カ、ツ、カ、リ

長、波、晚、天、より、余、と、人、好、飲、活、る、入、り、行、り

李、鴻、章、十、七、日、午、後、十、時、分、只、今、出、発、す、り、行、先、北

京、より、再、自、廣、東、に、歸、り、和、好、也



李鴻章香港中夏七月十日安平號二集上海  
向行營地之出為中 同從多直隸總督之任也  
列國之商務す、香港に及ぼす

二十日 土用入り

早起滿園菜園をみる、葉もよく、病も好

小生誕生之佳辰、お泊赤子と稱へて、生る長也

一松祝儀之飲、おや、お泊も、送る山中、行

李鴻章北上車情 南臣特電

李鴻章之北上、官命ありし、某國の秘密勸誘、  
し、説あり、同人北上、直隸總督の任、就き、列

國の商務す、香港に及ぼす

と、禮和の目的、多し、某國と、除く、外、列國、其、任、を  
認り、從、和、議、を、講、じ、て、處、を、  
二、十、

二十

快晴、八、十、日、早、朝、茶、器、類、を、磨、き、あ、り、新

宅、に、頓、け、り、以、故、仕、採、名、を、こ、と、向、ら、し、む

大、八、軒、便、箱、振、り、書

幸、而、黒、白、を、未、西、公、使、り、北、京、密、使、所、托、こ、し、信

を、美、く、懐、恨、を、可、言、唯、神、心、に、如、夜、を、結、り、お、り

之、極、新、吉、輕、症、中、風、に、對、す、り、前、田、鬼、舞

を、即、ち、鎌、倉、に、向、り、石、勝、院、に、前、少、権、使、供、下、布







至りては法律と陸海の事なる十日の間に  
有線も復改の事あり  
新電もあつて休息似れぬと長談す  
三子曾六郎洋行の可なり候ありとキリン奉酒  
十二瓶をたま  
黒田より午後三時對清参見の驚愕ありと林  
と海へ七海あり  
前田此話参見一冊新著一見對話  
夜十時大八箱根より由宅改り途中横濱噴火あり  
山下に初聲と聞かすお徳の事あり

兩國國權の先宣言す

兩國對清の宣言戰事の確言

一 黒龍江のラゴウエチエンスク、ハバローカ、ニコルス、ウツリ、

ウラチウオストク、等、地方の去る十七日、策戦軍の狀態、

あり、皆露國の宣言あり

廿三日 月曜、ハチ四交の暑氣

晴、お徳校後参り、表宅源太仰天津より書

以し書状持参し、續健剛對話あり

前田此物の衛生組屋屋議、喜賀代と係りて

出頭せし人員不足と聞屋不あり、南津より

有線あり











於早起山下瀛海... 謙卑より極其聖徳

榊山... 但願二十七日... 確言... 夕生御一辞去

午後... 草の... 前説... 但し...

但し... 初封名

天神像... 拜禮

二十六日... 九十一番

... 九十一番... 上昇

大八羽田... 外國造学...

... 榊山... 長水場...

... 未十... 禱...

付せ...

李鴻章... 佛國領事... 尚岩

佛國領事... 昨日... 李鴻章...



回答せり

佛問閣下果は天津、拳匪を制壓せし成算あり  
有らんや

李答成算あり

佛問北京に列國公使の重圍中より出るとは得んや

李答然り之を保護せし衛兵を出て来らざる

佛問端親王、剛毅を捕へて外國軍に引渡す

と得んや

李答否是微力に能く所にあらず

初答集、李答まゝの回答

客問清國政府は官兵を團匪と外國軍何れを捕す  
所を正当と爲らんや

李答政府は所を團匪と輕率の識を免れずと雖

外國軍の大沽砲撃亦早計なりと云はれり

客問列國はし支那を分割するに決意其結果は

果は如何

李答國を擧げず外國兵は當らんのみ

客問外國軍は閣下を載りて拳匪を討伐すに以

てんや

李答必らず其場合を知らざるべし且る是亦の然



十嘉のころに

客問拳匪鎮定之後天改葉の勢行をどうにか  
亦必る言く言し難し其の時法回をどうにか  
果し何人かあり未だ知づらんや

客問拳匪の勢在果し或許に軍兵を要しや  
亦客答數百とある足れ

客問何時北上せらるべ  
李客未だあり

右に問客僅に口頭の語を屬すと雖も其抱  
負は天に乞ふべし二十に先公の果る法回を相

石亞細亞の五家傑誰に被たせりとの我意

二十七年 晴九十夜

女との時出宅上階れ時を分り漢軍より常州  
平陽の海水流れ行り卒首を打ちあせり

中場外に草標の小平も何  
河を流れく起頭十の計り平臥

小平伊多保出のや何因りたるや

楓林に掃除印内掃察前田に印地徑畫く對談  
如流に好脚を滑り、積善を修磨し、仍る六  
千ヤの泡器を半酒と買ひ、為る者歎歎



在北京英國公使マゴトト氏より七月四日書信  
天津に英國公使マゴトト氏に書信(亦一日)北京海軍中  
公使より七月四日書信に書信に對し切に救護を  
求め糧食の貯蔵に二週間以上支那海軍兵に負教訓者  
は劣小に於到底に劇烈に致致に對抗を欲す  
已に戦死者四百名負傷者之に倍す

英國追加軍事費

下院、千五百萬磅の軍事費を提出せしむ  
李鴻章幕僚より直談

李の各國公使に會商せざるにす未だ何事も

李の各國公使に出る事なきは、海軍の得策を所以と説き  
海軍に塔し、大沽に向ふ事、成り李は北京に  
交通は直接、飛舟山東と經り、李は直隸  
總督の官を常とし、海軍の衙門に有る、英米日  
三國の援助を仰ぐと欲す、李は揚子江一帶に幕部を  
シール中將南ト

旗艦セシより、號を上海より着せし、楊子江地方  
不穩に飛臨ありしなり

清帝に親電の對し、獨白政府に拒絶  
七月五日  
伯希岩







英國公使四日所書狀文言續報上海七月二十七日午後  
 二時  
 之七哈氏此書狀之認む、陸路の馬を打倒す  
 及之難、紐街の堤壁早ヤードを包拵せし地點の防守し、兵を  
 清兵の其包圍地、終始砲撃を繼續せり、以て歐洲人の危急  
 飛常あり、食糧の尚も優に二週月を支持し得べく、又清兵  
 の表面強硬を以て實際決死の外人等、防衛する地點  
 の直接攻撃の所に入り、コラッ塔の煉瓦を、おまじり、若し清兵  
 の猛烈な攻撃を、来らんとも、最も僅に四日を支持し得  
 べし、  
 (キ)

露國陸軍在シラバトキン氏海陸軍家懐月より支那の馬  
 せんとす、自國軍隊の指揮スベリ、都令なく、聯軍  
 を指揮す積りなり、  
タムスノ、即彼得堡の將  
倫敦七月廿日  
 英國ローレン中將東洋艦隊司令長官センチオリオン號、南下  
 して吳淞留置、中將ハラクリキー號、飛替へ上海、東の總  
 領事ウーレン、中將フット、揚子江一帶地方、防備の固  
 し、協議の所あり、英艦十艘揚子江に集中す、  
 露國の旗、向ふ  
 北清の消息 七月廿日  
 天神降、全軍、七十、三、軍使と北京、池、殊、銭、加、海、公、使



より元命ヲ賜ひし密使ヲ派遣し以テ聯合軍ノ救助進軍ニ事セ  
報下併テ昨今ノ状況ヲ知道セし

廿九日 日曜

暑氣微雨冷氣七十二日とあり八月十八日と減暑  
あり於南道草橋ノ例あり義和團函ヲ持為し  
隨テ陳ケ建シ生シ。空城九町とあり上西ノ事即ハ  
内地ニ進ケしむむ既行無事山ニ在リ大和屋あり  
義和團報知あり

李鴻章ノ十三日とあり十七日とあり其旨以テ本紀  
お滋養ノヲ換束ト云亮前田ニハ伴海草上野ニ到

相入ノ物也 徳母梅也典子ト云ハ少也

清帝ニ上諭ノ真意 頑固暴戾 上海廿七日午後

昔ノ上諭ノ真意 袁世凱宣盛懐ノ傳ハ如キ也

以テ非ゾ一ハ其意味

各國公使ノ殺害ニ便ラス却テ又送還ニ便ラス留ナリ

以テ強制ノ用ヲ為リ因テ嚴ニ本ヲ鴻章ヲ建シ進京セ

サレテ責メ給録兵ヲ知ラズ教メ李鴻章ヲ直隸總督ニ

任シテ各國ニ開伏セシム と云ハあり

李鴻章ノ上諭ヲ讀んで甚ク喜ブ直ニ辭職シ

御里合肥ハ物外ナリ



袁世凱以上ノ意味ヲ各國傳ヘ報道セリ

聶子成陣亡九日會台ノ戦日本軍ノ戦ニ敗北セリ

種<sup>て</sup>ノ説<sup>イレモ</sup>天津協定收我軍ノ自<sup>ラ</sup>書款

中明<sup>カ</sup>彼<sup>レ</sup>陣亡<sup>セ</sup>書款<sup>ヲ</sup>

三十日 舊七月廿

冷氣七十度依例廢前格單

車未米去解備<sup>ニ</sup>シ<sup>テ</sup>シ<sup>ト</sup>

平坂運部梅岡海軍右衛門進<sup>シ</sup>シ<sup>ト</sup>

あり三田黒田伯<sup>ト</sup>訪<sup>シ</sup>天津<sup>ニ</sup>電報<sup>ヲ</sup>送<sup>リ</sup>

西公使<sup>ノ</sup>特使 廿二日 七月廿七日 元 津 鄭 領 事 館 記

在清本邦公使<sup>ノ</sup>特使<sup>ニ</sup>當<sup>リ</sup>七月二十日<sup>ニ</sup>於<sup>テ</sup>北<sup>方</sup>の  
為<sup>ニ</sup>地<sup>に</sup>到達<sup>シ</sup>電文<sup>ヲ</sup>送<sup>リ</sup>

本官<sup>ニ</sup>間<sup>断</sup>なく法國兵<sup>ノ</sup>攻<sup>撃</sup>に<sup>對</sup>し<sup>テ</sup>防禦

最<sup>モ</sup>右清國兵<sup>ノ</sup>大部<sup>ノ</sup>董<sup>勳</sup>の<sup>屬</sup>に<sup>屬</sup>し

り<sup>テ</sup>日本<sup>兵</sup>及<sup>ビ</sup>義勇兵<sup>ハ</sup>此<sup>ノ</sup>際<sup>ニ</sup>陸軍中<sup>佐</sup>

の指揮<sup>ノ</sup>下<sup>ニ</sup>に<sup>テ</sup>行<sup>動</sup>す<sup>ル</sup>のみ<sup>に</sup>天津<sup>ニ</sup>到<sup>リ</sup>

着<sup>キ</sup>特使<sup>ノ</sup>傳<sup>ハ</sup>依<sup>ル</sup>に<sup>テ</sup>月末<sup>ニ</sup>於<sup>テ</sup>日本<sup>軍</sup>分

隊<sup>ノ</sup>他<sup>ニ</sup>分遣隊<sup>ヲ</sup>共<sup>ニ</sup>到<sup>リ</sup>著<sup>ス</sup>べ<sup>シ</sup>と<sup>ス</sup>我<sup>々</sup>右<sup>軍</sup>

隊<sup>ノ</sup>到<sup>リ</sup>着<sup>キ</sup>多<sup>ク</sup>分<sup>テ</sup>防禦<sup>ヲ</sup>守<sup>ル</sup>べ<sup>シ</sup>と<sup>ス</sup>我<sup>々</sup>右<sup>軍</sup>

に<sup>對</sup>し<sup>テ</sup>清國兵<sup>ハ</sup>七月十七日<sup>ニ</sup>即<sup>チ</sup>一<sup>部</sup>以<sup>テ</sup>來<sup>ル</sup>格



此交機密  
件外呼號  
降中見たり

對す銃撃を休止し清國官軍と談判を命じんとす  
意多のわし時と遷延の呼号し即着せし  
んわの面従せり

今日十九日と我國人の死者の義勇兵兒島外官補  
安藤陸軍大尉中村秀雄他六名又負傷者義勇兵  
植原公儀館二等書記官野口面學生水兵六名然し  
孰も傷あり外微傷と只好あり

紫中依の通信報告 七月廿九日在天津海島の將電報  
二十七日午時の時分より廿三日不為電報  
事日午前四時五分日分を以て

紫中依七月二十日附報告概略の如し  
各國公使館六月十三日より全く閉まり

二十日より十数營の支那兵の物より毎日晝夜同断り砲  
撃せり各國公使館と結し付け線と以て防禦線

より紫中依日本兵伊國兵の全部露佛墾兵の若干  
を以て蕭親王府の防禦を任し今も僅に該府の半  
を保つ我兵の武器も射り水兵も義勇兵十四彈藥高  
各人二十五發許り食料は尚ほ六日位も入り

北京城内に支那兵約三十營若干、神機營ヲ混せり  
援軍の到着一週回以内にもせられれば恐らく為地も入り  
難らん

食料の六日  
二十一日  
二十二日  
二十三日  
二十四日  
二十五日  
二十六日  
二十七日  
二十八日



天津聯合軍の太沽を破り天津を陥し而して漸く北京攻  
撃の段に相成り實勢が一變又セル

第一 魚雷の一時聯合軍の指揮を為すに力

將軍アレキシラハ天津北東に向ふ勢を以て而して歩  
ヲ轉シテ旅順に向ふ右に我日領地を事撃しを以て俄  
に勢弱む状を觀ハス

黒龍江沿岸に防備を以て兵を立し糧米も亦多し五萬十萬  
と稱す。兵は虚勢あり此際本國より實力を起す時節  
引くは西北理鐵道を破壊し江中汽船を打沈スル  
長途出兵を容易ナラス漸く虚勢を為す



財政上の困難ありて然らば北京聯合軍に日本も他  
の任を滿洲地方根元を實力を根絶せしむ

第二策は最初二一と指揮官の解散を要する天津  
津北派の切りしは兵を敵を根絶する天津に向  
進退機漸く十日の天津を反り目的と進退機を  
太活に強難を返しては北十級、軍艦七隻を上海  
吳淞に向て進出する此楊子長江一帯、夏秋起す  
上海漸く平穩を以て勢力を分りぬ  
右に於て當北去り英南に逃れ日本獨り太活天津を  
突進攻撃し、勢を取らば占領の後、露英恐強、其方

針を穿ちて、結局日本は御光を、使はし、且活の、實情  
を論究し、日清戦争の後、兵隊を、移す、内各隊、は、  
千級、の、千、を、好、漸く、訓練、を、片、用、に、義、和、團、は、  
之源、因、日、清、の、役、に、戦、死、者、を、其、解、を、成、宋、慶、馬、玉、崑、袁、  
世凱、等、の、心、年、多、年、の、積、情、を、あり、然、に、魯、國、の、進、軍、を、  
日本、の、遠、征、中、の、旅、費、は、大、連、を、移、す、物、日、に、借、入、る、に、  
當、右、領、に、結、局、西、比、理、鉄、道、を、吉、林、盛、京、に、延、長、し、白、旗、吹、  
連、を、牛、莊、山、海、關、を、通、貫、す、一、喝、北、京、直、隸、を、掌、握、す、  
實、情、を、あり、或、進、軍、を、九、連、城、鳳、凰、を、着、新、木、海、撤、牛、莊、  
塔、子、蓋、平、建、安、得、州、金、州、を、別、處、に、移、す、其、營、を、第、一、威、赫、







結了し其為北京公使生動の消息不其方或國  
匪官各の混同するも又端王剛毅裕祿之頑冥の  
方針之明も慶親王榮祿等開明の公使の救撫を  
如く其極の夢想を殊に袁世凱山東巡撫の南清  
書翰章及劉坤一張去洞の聲息を通し今も北京  
政府と反對の論を取端郡の協定を遂行せんと  
し傳報せり然れど天津城攻陥の後裕祿総督を  
四野に免職せしめ河津と名を自隸の督と稱せんと  
せし詔と受たりしおる後東より上海の消息を  
七月八日西大任の命七橋を告ぐと此の天津為城

七月十日あり書を賜章在東京赴身七月十七  
日李都上海着二十日あり北京城内の公使館を  
銃撃せしむるも太沽攻守の術十日あり然れ七月  
十七日と攻勢を信じて自休せり書を賜章は  
天津の成敗を意方も觀望せり天津の攻陥を  
自疑し北京の聯名大軍の内相も危急と上し  
自上海より出る書り此の機中を攻勢策を試むべし  
目下北京の體面を維たすも各國の公使を價し  
勿く不生不致の間を遣は南北の擾亂の自聯合  
軍の機力より割し支那全部の兵力を直隸集



中七物ヲ所あるん后也南洲黒統より物子江邊に交  
鼻徒輝起りたる號を大いり勿列國を其しめ而して  
列國中に蘇合と解池とを味り出せし獨り中陸  
日邊を御先と爲り馬鹿をわらひ日女軍に身  
一を捨り清國前役の復讐をせ收せん歎こり  
李節の老猶多段にや栗香の葉せうせんを新  
手と功名連を免ししはるも御領事、節の  
老名、一喝せうし茶事ありん甘くすりかせり  
節曰く粟食の弊は使使保護ララこしと確報  
唯け友見償するは日活に致し財産を以てして

支方又は右全往大臣ありて談判を可も改革  
を勸じも康梁ニ子し如し官人を用ひざるは  
れし如く大后の恩感懐せりとありぬ故に全往に  
意を言ひし并に其の用ひし

張之洞







還向船政し以て微傷はる不負は極元氣か中  
是の一大白き瘰癧況と比り申

又三平浮船舟先も菓子と誤承りし旨也  
宿弊完

云

晴し夕の炎暑初夜 枝邊山を悦状と書す

植木各二六本あり 勢宅園中梅又二六の枝を剪

けり 端より地を整理す

可き者前より 傍即分割地と權部所一件評

議持来り 是より 多酒と云ふ意見あり 申す

前田氏哉し一件是の旨思ひ 田中御常の御筆  
を掲げたり 應許振る 徒勞と云ふと  
申す 若き者あり 轉業し 軍中の付り 友  
年後より 田中と云ふ 談判す 思ひ 日伴と云  
申す 應許の御筆 田中園中 布置 銀石 草木  
景況 諺と面白し 一七七年 是の御筆 着す 原因  
關係し 西郷南洲と云ふ 状と云ふ 御筆 出  
し 亦し 御筆 是の御筆 是の御筆 是の御筆  
改す

是の御筆 是の御筆 是の御筆 是の御筆



此方部之身是正研高木兼寛診察する事  
車中へ軽症と診断して鎌倉別荘に於て治療  
せしむる事全快なり南無阿彌陀佛とありて鎌倉に  
戻りて居りて又、海軍中置とありて  
内達新茄子ツツミ菜葉ニ及りて此の物也  
三日晴ハ十四夜  
大ハ多病種祀々ありて中夜驚き泣く事  
午前按脈あり  
小平總領信州箱評より第貳号の電報あり  
同人長瀬中尉より小川平徳より大ハ八日沙粒と

恙なき鶴の羽切り多事

甲 夜暑如燒

早稲穂陳園庭 畫囃者一井監の畫池原  
に代價二十如日本とありて

田中細常より借書状の字は長中にて揮山

伯高田郎の身物移りて子采只今山縣

經理とありて長瀬長孝内天津より函ありて

此の天津函ありて此の字ありて

ありて田中より長瀬坊地考とありて刀剣觀覽

手島洋食園を徘徊看月露涼涼氣秋夜



園中夏花とあり枝を折り土を盛りて花の  
油を茄子根からとる市求の法

吾

野掃除 高橋新吉の謝林集

洋館 菊の香の太極の然り遊者且梅山

到るの百合花の能中梅の兵衛の前後

出師の老翁の氣節の梅の節

晚方園中掃水長政東話の節の在九時の

妹阿吹の季節の山守の猪の香の世の言

祭礼の

六 八十六

早起の門外運動の歩の不辨人顔

黒田の書状の巻の田中綱孝の君の此の

月半の夜の時奇の夢の初をの 孝の前後

法向の法向の物

阿正の十年忌の

晩食の茶の故の出て下駄の買の又の下の

飛の鳥の茶のあつたの思の思の茶の茶の

老翁の法向の月半の月半の

五



此世狀  
外世別

甲州常々略之方近者未

横原陳政北東の地城中に在りて其の北

也より報あり

黒田と名に田事出来不為り使志を越りて

其の仍の葉家能之を之地守に傳家也

也之事

甲氏に於て其地を具に自法用之西に其地

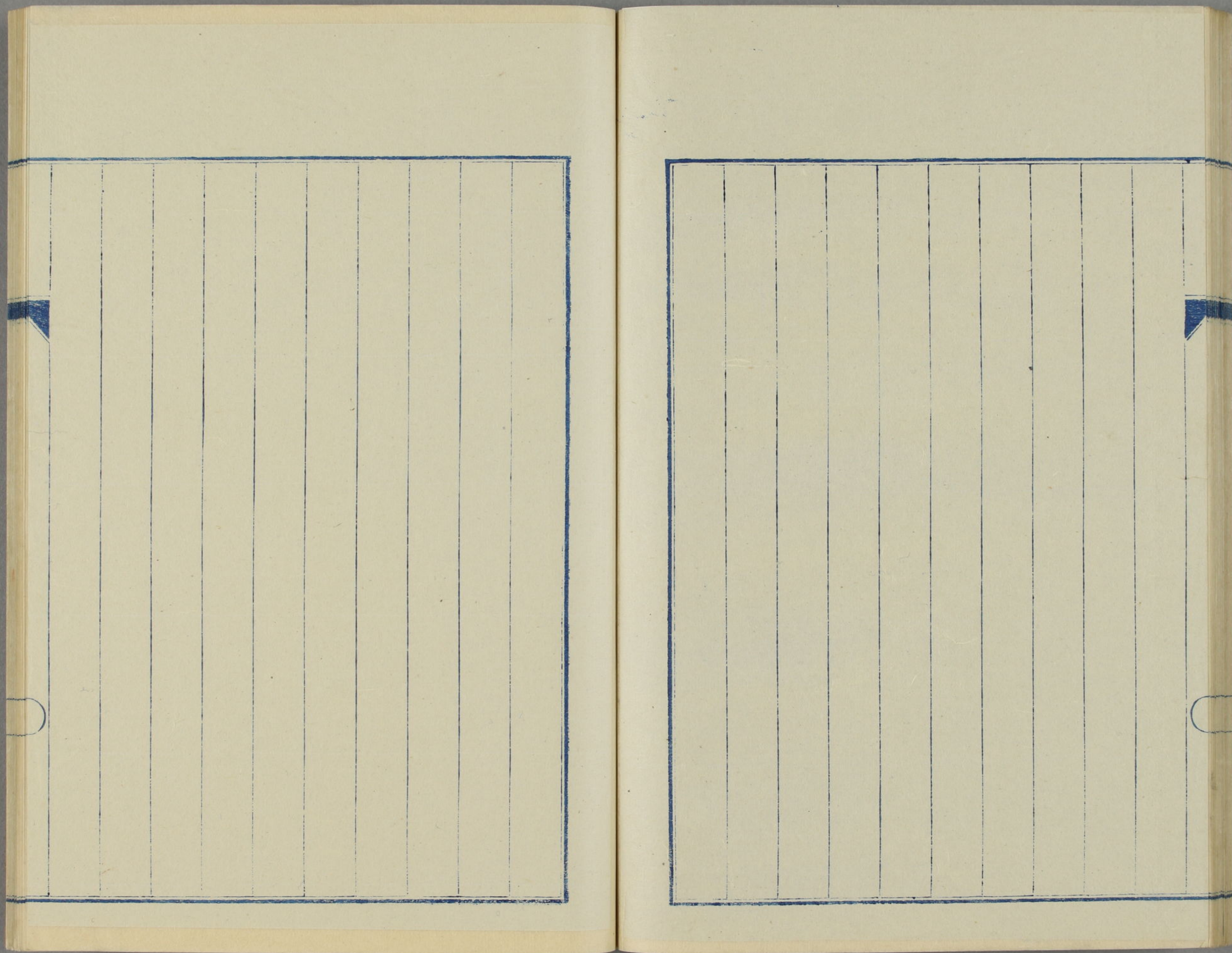
今之狀に近切りて田中其地也

其後本年上中略之出納會計あり

海舟身要福の事書略字に起り

古教指白之金と略りて其在月老也







以下  
15丁  
白紙



三十一年一月十日紀事

楊在山高林遠處予與一友對坐頗言甲  
蘇者必飄然來于傍溫顏帶笑如  
曾中者一蘇者帶予曰噫兄何姓  
也家貌不異于三十年前初見時者  
都曰今上皇帝百三歲代帝王中第一  
隆運此立海宇雄視宇內可謂聖德  
無比予曰兄存才夙寫經編德化  
神彌之職亦古人之伊尹呂望伯  
仲洵稱君臣契合之妙談也



酒来音出まふ所寛は床前大瓶梅  
烟燭如雪下与平野飲推戸則  
林密烟霜弥漫無路身立蒼翠  
之升方好少快思覺而此夢  
枕上挑燭而記取治世事一月九  
天未明六十三年重慶方子記

馬鹿馬鹿 伊藤元シヤハバウニテモエイデゴ  
ガンセンカホウシシ大久保シシモ此馬鹿漸シバ時モ  
タテゴガンセンア此夢物借ラシモアナタシシジシニ思ッテ  
カワリシシウイ藤サシ

三月二十日 楚南の編返る電報の接一葉必公使  
サトの祝詞を賜

一箱封紙付 妙なき深き事 若くは健  
往ま 勤め 修養 邦遠 征軍 教月 七  
年 坊 あり 村 あり 立 放 守 階 伏 日 凱 旋  
之 勢 あり 近 之 勢 あり 冰 心 あり 勇 回 併 あり 七 浮  
大局の如く 仰 如 事 在 躍 在 心 反 あり 得  
夫 意 也 事 あり 此 首 不 具

明治卅三年三月三日 日本官島城下  
其美必屋桂公使サロウ向不



十二月十日晴 晴 壬申 嘉慶十年十月十日

朔大八芒浦河水流山下源矣印七坊七望置

船歸一芒浦一昨夜二海路

大者長者之來木品之買取

可印之村銀之利足助定

四年四月八日新  
四年四月八日新

困為舊物之掃之掃陳

出也之幽重子也携於為物種記日均運

年之老幼之均定之子切身者所願博方早

解溢四夜於方林視印之夫狀名出子運而

新何病事分記



大八徳入り切宅銅製を喜次大黒持持内方  
初神末九千大長。因心七世幼地氣也

二日 禮巳酉

快晴大暑なり新廊下之床下板をハノ拍入段  
元年又北堂南楹之板楸補足

長井高明へ来拓亮所賞却之時合印蓋却

与家計を整理の上策なり決断すた上座也

老見年飯多食す

山中庄次初嫡を薫耳不少候也徳心山名

出友喜此治といふ一歌性持来仍与神田身科院

病室へ行父子と牙齋をさし出り

阿耨耆菩提を減 三十三分林来新徳所百歳

水痘あり

長屋端の夏年中 揚海代に成中書

梅子熱気あり

三日 晴

大工来り新廊下又南楹の日々修繕

午後長屋寛三入来昨日屋澤より久米日下来

口喉と四年に不景氣なり夏より一分も好境なり

上杉より行くに出来ぬ弟来厚お喉と心下大



日中揚子行海月二家七事帰り新道を勸む人  
第軍等

揚子為如九百以上也やう有現新の七二況

可名増帝國海會良集

四、五月三日

時大工為上段手取揚子張板西洋館廊下推入修繕

揚子新解熱

張守珉未亡人先公使務庶昌之娘可子張若梅

日軍為海種支即揚子為産者

古孫見り切定揚子利息分借用し

孝母樂部、之府と出市評議員會より伊藤春

中芳、殊院の免職院の極辭教、之より意見

一、右等憲法之月也、改訂也、此海民選議

院の所、此代十四年大隈、國府滿七方柳川親王

密奏せし、伊藤、也、大膽、た、不、改訂

高揚、新、老、曰、國、事、日、非、可、老、不、大、減、減、後、多、滿

信星の財的論衝突す

午後、新、前、切、脚、上、移、七、九、美、會、在、子、扱、高、子

背、七、七、海、先、七、海、死、八、千、山、也

お徳を極語、候、り、東、法、銀行、に、あり、山下、七、五、里



云歸りし

五日

明大素佛増之改置大工をまゝ終る

威曜院二十回忌

大八支那諸學棟設立森走

徳女振渡坂婦人會十回拜謁者の中

青山山より暮集

目黒来り焼香晚飯を食す長政屋ゆき前

しるふ坊老郎の話、不立成且は改目念坊老郎

とありし節地留書切之事、地主より一切細話

しるふ、あつたせうとあり

六 小雨

午前四時目覚む坊老郎地留種勸考

午前七時銀行へ行つ流る北越河不立坊老郎

午前八時備前河老郎と九時一より坊老郎所

行きて在る御會の地留種勸考とあり

午前十時、坊老郎の河老郎の勸考とあり

山中在る所、坊老郎の勸考とあり

午前十一時、雨均花山中在る所

坊老郎の勸考とあり







高杉新吉を仰ぐまゆと鎌倉を仰ぐ石左と  
三田山を仰ぐ菅原は仰ぐ兄弟會を仰ぐ目録の  
以上長政日行細君の未御風の料理と酒を仰ぐ  
編り五話一十才高杉所に集居を仰ぐおれは月某  
物宅を仰ぐ長政を仰ぐ

遠坂忠印湯河杉林の實力なり高杉誠業を仰ぐ持統印

飛也

吉 古羅

晴 上杉ハハコキキ 湯河杉林實力なり高杉誠業を仰ぐ持統印

伊藤侯管略千枚大磯より出京なり高杉誠業を仰ぐ持統印

元禄五年十一月一日 今ハ西園寺の代理を仰ぐ

大山美代 山崎と仰ぐ高杉誠業を仰ぐ持統印

高杉誠業を仰ぐ高杉誠業を仰ぐ持統印

高杉誠業を仰ぐ高杉誠業を仰ぐ持統印

高杉誠業を仰ぐ高杉誠業を仰ぐ持統印

高杉誠業を仰ぐ高杉誠業を仰ぐ持統印

高杉誠業を仰ぐ高杉誠業を仰ぐ持統印

高杉誠業を仰ぐ高杉誠業を仰ぐ持統印

高杉誠業を仰ぐ高杉誠業を仰ぐ持統印

高杉誠業を仰ぐ高杉誠業を仰ぐ持統印



未嘗嘗席丘墨狀也。昔。相時勢之能記  
凡夕 酒在田入

十三

既掃除境。為業。未始。在官。而。尾。之。整。一。此。也。  
深。く。い。ま。抑。ひ。ま。り。ま。り。ま。り。尾。神。頼。り。ま。り。ま。り。  
午。後。五。時。始。然。所。行。分。割。地。面。を。受。け。手。評。評。  
早。日。と。確。定。し。る。事。也。ま。り。ま。り。ま。り。ま。り。ま。り。  
右。列。子。掛。に。備。法。を。計。り。ま。り。ま。り。評。判。見。ま。り。  
末。均。途。を。相。取。れ。部。々。鴨。一。田。買。力。均。宅。  
十。一。 信。羅。年。西。

所。物。所。銀。次。多。く。尤。官。業。尾。七。三。三。取。路。の  
漆。衣。修。儀。儀。の。事。も。ん。ん。ん。ん。其。折。角。云。く。多。漆。衣。  
持。出。す。お。え。批。事。南。面。北。面。之。修。儀。を。修。の  
ハ。下。河。原。も。大。法。を。修。儀。の。修。儀。を。修。儀。  
其。及。方。々。を。修。儀。を。修。儀。を。修。儀。  
相。野。又。鴨。と。ま。り。ま。り。晚。辰  
十。一。 雨。霧。冬。三。五。分。時。

暖爐 焚石炭

築。館。卸。船。層。社。初。務。前。田。法。考。黒。河。伝。道。即。改  
持。出。一。人。三。身。方。社。の。改。修。其。力。を。修。儀。を。修。儀。



田庄或より返るる代り去りて平郵船會社の子を  
自らの力に不及なり。新島島午辰のえ

大山侯海空割り始るなり

別雷大八号標。百回屋所考なり

そのまゝ氣持別り。何れも暖かき火を不絶

山中委座初り。先判忠告なり。伏拝命。哲あり

十一日 晴 日曜

朝比之。後贈りたる未割。栗木に小枝葉を纏繞し

谷子老るる。何れも懐き。忠告なり。哲あり

星亨。市務事。倉中より收貯事。件出あり。哲あり

三

晚方日存。梅買物。日午梅。西川。梅。收表。上。昔。八枚  
三。此。是。梅。命。中。華。亭。為。晚。食。他。皆。以。

風味。一

梅子。新。察。川。村。正。治。梅。就。二。人。年。川。村。水。痘

し。山。上。山。上。山。上。

十七日 晴 日曜 甲子

午前。庭。内。園。為。之。掃。除。西。川。山。上。梅。八。枚。打。井。田。梅

八。枚。打。井。田。梅。減。熱。三。七。日。水。痘。カ。エ。ト。申。上。り

梅。子。買。物。山。上。梅。八。枚。打。井。田。梅。



又三聖生明之交しを祝い為計七梅の事  
伊予保湯池を神し力流梅子云云。梅の家  
后の口月計未之君此斯大思為其甲之常言於祝中  
十六 咕 池水後水  
池水に夢を為すし仕掛を僕王に命す。職任所  
成り益浪を多利と命す  
岩井 初六時。演習地より均原に之あり午後  
一。執宅より清い水命り多原版を梅の地  
午寝す。梅子あり。梅素茶三十七分九分。熱湯  
十九。時。晩来り雨

此目不可忘 午後所奉俱樂部無所属同志會を幹子  
有地と娘の新村島と島村好意に於て先程地  
有地と娘の新村島と島村好意に於て先程地

伊藤徳理、志者、試し康也。

一 星さるの道信大臣職在の内閣威信と属の地等  
・あり徳と志と措きあんとし望む

二 官業と遊仙とを修し官紀と振業とを修行す  
と望む

三 國務と黨務とを此清き事なりと望む

第一忠告



貴族院議及連署之書は経理長官忠告を以て

第二決議

一月別各々時限に於ては横債を以て一忠告之主旨を以て  
之を協定し其の議決を以てす

一是之當決を以て其精神を表す

一逓信省事務に於ては逓信大臣相率て見出さるる議

定は各々之を以て一議席に於て之を以て之を以て

之を以て之を以て

他協定に於ては逓信大臣相率て見出さるる議

定は各々之を以て一議席に於て之を以て之を以て

逓信大臣相率て見出さるる議定は各々之を以て一議席に於て之を以て之を以て

要す

其地は各々之を以て一議席に於て之を以て之を以て

其地は各々之を以て一議席に於て之を以て之を以て

其地は各々之を以て一議席に於て之を以て之を以て

其地は各々之を以て一議席に於て之を以て之を以て

其地は各々之を以て一議席に於て之を以て之を以て

其地は各々之を以て一議席に於て之を以て之を以て

其地は各々之を以て一議席に於て之を以て之を以て

其地は各々之を以て一議席に於て之を以て之を以て











